

## ヴェーダーンタ哲学とは何か

今日一般にヴェーダーンタ哲学と呼ばれているものは、実際には現在インドに存在するいろいろ違った宗派のすべてを含んでいる。そんなわけで、いろいろ違った解釈が行なわれてきた。私の考えるところでは、彼らは二元論すなわちドヴァイタ (Dvaita) から始まり、非二元論すなわちアドヴァイタ (Advaita) に終る発展的過程をとっている。ヴェーダーンタという言葉は字義的には「ヴェーダの終り」を意味する。『ヴェーダ』<sup>1</sup>はヒンズー族の経典である。——『ヴェーダ』といえば、西洋では往々にして『ヴェーダ』の讃歌と儀式だけを意味する。しかし現在は、これらの部分は役にたたなくなっている。インドではヴェーダという言葉は普通にヴェーダーンタ哲学のことを意味する。すべてのわが註解者たちはこの経典から文章を引用しようと思うとき、原則としてヴェーダーンタから引用する。ヴェーダーンタは註解者たちの間では別にシュルテーイス (Shruti 啓示)<sup>2</sup>という術語的名称がある。きてヴェーダーンタという名称で知られたすべての書物は必ずしも『ヴェーダ』の儀式的部分に従って書かれたものではなかった。例えば、その一つ——イーシャ・ウパニシャッド——は『ヤジュル・ヴェーダ』の第四十章を形成していて、『ヴェーダ』の一番古い部分の一つである。他の『ウパニシャッド』<sup>3</sup>で『ブラーマナ』(梵書)すなわち儀式的書物の部分をなしているものがある。『ウパニシャッド』のその余の部分は独立している。『ブラーマナ』のいずれかの部分にも『ヴェーダ』の他の部分にも含まれていない。しかし彼らが完全に他の部分から独立していたと仮定する理由はない。なぜなら、われわれがよく知っているとおり、これらの多くは全然散佚<sup>4</sup>してしまい、『ブラーマナ』の多くは絶滅しているからである。そこで、独立した『ウパニシャッド』は時の経過につれて廃棄された『ブラーマナ』のある部分に属していたのが、『ウパニシャッド』として残存したことも全く有り得ることだ。これらの『ウパニシャッド』はまた『森林の書』すなわち『アラニヤカ』(Aranyaka)と呼ばれている。

1 『ヴェーダ』は主として二つの部分に分けられる。「カルマ・カーンダ」(Karma-kānda)とジユナーナ・カーンダ (Jñāna-kānda) ——働きの部分と知恵の部分——である。『ブラーマナ』(Brahana 梵書)の有名な讃歌と祭礼は「カルマ・カーンダ」に属している。儀式関係から離れて精神的な事柄を取扱った書物は『ウパニシャッド』(Upanishad 奥義書)と呼ばれている。『ウパニシャッド』は「ジユナーナ・カーンダ」すなわち「知恵の部分」に属している。すべての『ウパニシャッド』が、『ヴェーダ』から抄出した部分として構成されているのではない。いくつかは祭礼篇のなかに散らばっている。少なくとも一つは「サムヒター」(Samhitā)すなわち讃歌篇のなかにある。時おりウパニシャッドという語が『ヴェーダ』に含まれていない書物——例えば『ギーター』にも適用される。しかし原則として、『ヴェーダ』のなかに散在する哲学的論文に適用される。これらの論文は集められて、『ヴェーダーンタ』と呼ばれている。(原註)

2 シュルテーイス (Shruti) という語は——「聞かれた事柄」を意味し——『ヴェーダ』文献の全部を包含しているけれども、註解者たちによって主として『ウパニシャッド』に適用されている。(原註) 従来邦訳ではシュルテーイスを「啓示」としている(訳者)。

3 『ウパニシャッド』は百八巻であると言われている。それらの成立年代は正確に決定することはできない。——ただ、それが仏教の運動が発生したときより以前のものであることだけは確かである。

『小ウパニシャッド』の若干篇には、その後の日付を暗示するようなある兆候があるけれども、それは、その論文成立の時代の新しいことを証明するものではない。サンスクリット文学の多くの場合のように、ある本の実体が非常に古いものでありながら、宗派の徒の手にかかつて彼らの特別の宗派を勿体づけるために、後世の出来事で、いわば上塗りされていることがある。(原註)

それでヴェーダーンタが実践的にはヒンズー族の経典をかたちづくっている。そして正統派に属するすべての哲学体系は、これを彼らの根底にしなければならない。仏教徒やジャイナ教徒といえども、彼らの目的に合致するときには、ヴェーダーンタから文章を引用して権威づけるであろう。

インドにおける哲学の学派はすべて『ヴェーダ』に基づいていると称するけれども彼らの体系に対してはそれぞれ違った名まえをつけた。最後の学派であるヴィヤーサ (Vyasa) の体系はそれ以前の諸体系よりもより多くヴェーダの教説を自己の拠り所とした。そしてサンクヤ (数論派) やニヤーヤ (尼夜耶派) のような先行する各種の哲学をヴェーダーンタの教説と調和する企てをなした。そこで、それが特にヴェーダーンタ哲学と呼ばれている。そしてヴィヤーサーのストトラ (Sutras) すなわち『箴言集』は近代インドにおいてヴェーダーンタ哲学の基礎である。またこれらのヴィヤーサーのストトラは違う註解者たちによつていろいろ違つて説明されてきた。概して今インドでは三種の註解者がいる。彼らの解釈から三つの哲学体系と宗派が生じている。一つは二元論すなわちドヴァイタ (Dvaita) である。その二は修正派非二元論すなわちヴィシシユタードヴァイタ (Vishishtā-dvaita) である。そして三番目が非二元論すなわちアドヴァイタ (Advaita) である。このなかで、二元論と修正派非二元論がインド人民の最大部分を占めている。非二元論者は比較的少数である。さて、私はあなたがたの前にこれら三つの宗派のすべてに含まれている観念をごらんに入れようと思う。しかし、それに入つてゆく前に、私は一つの注意をしたい——これら異なつたヴェーダーンタ体系は一つの共通な心理学をもつているということ、それはサンクヤ体系の心理学であるということだ。サンクヤ心理学はニヤーヤ体系やヴァイシエシカ (Vaisheshika 勝論派) の体系と非常によく似たもので、ただ小さい特殊部分が違つていない。

1 ヴィヤーサーは伝説的な学者で、ヴェーダの編纂者とされている。『生きる秘訣』 (日本教文社刊) 一〇六―一〇八ページを見よ。(訳者註)

2 註解書にはバーシユヤ (Bhashya)、ティカー (Tika)、ティップパニ (Tippāni)、チュールニ (Churni) などのようにいろいろ違つた種類がある。そのなかで、バーシユヤを除けば、すべてテキストの説明やテキストのなかの難語の説明である。バーシユヤは元來、註解書ではない。テキストからの哲学体系の究明であつて、その目的は言葉の説明ではなく、哲学を引き出すことである。そうやつてバーシユヤの著者は彼自身の体系を繰りひろげ、テキストを彼の体系の権威づけに用いている。

ヴェーダーンタにはいろいろ違つた註解が生じている。その教説はヴィヤーサーの哲学的箴言集に究極の表現を見出した。この論文はウツタラ・ミマムサー (Uttara Mimamsā) と呼ばれ、ヴェーダーンタイズムの標準的権威である。いや、ヒンズー経典のなかで最も権威のある表現である。一番敵対している宗派もヴィヤーサーの

テキストをとりあげて、それを自分の哲学と調和させるように、いわば強制されたかたちであった。極めて古い時代においても、ヴェーダーンタ哲学の註解者たちは二元論者、修正派非二元論者及び非二元論者というヒンズー族の三つの有名な宗派をかたちづつた。古代の註解書は恐らく失われたろう。しかし、それらはシャンカラ (Shankara)、ラーマヌジャ (Rāmaṇuja)、マドヴァ (Madhva) という仏教以後の註解者によって後世に復活せしめられた。シャンカラは非二元論的形式を復活させ、ラーマヌジャは古代の註解者ボドハーヤナ (Bodhāyana) の修正派非二元論的形式を、そしてマドヴァは二元論的形式を復活させた、インドでは宗派の相違は主として彼らの哲学の相違による。祭式儀礼における相違は僅少であつて、彼らの哲学及び宗教の基礎が同じである。

すべてのヴェーダーンタイストが三つの点で合意する。彼らは神を信ずる。啓示されたものとしてヴェーダを信ずる。そして万有循環を信ずる。われわれは、すでにヴェーダを考察してきた。万有循環に関する信仰は次のとおりである。宇宙にみちわたるすべての物質はアーカーシャ (Akāsha) という一つの原始的物質のあらわれである。そしてすべての勢力、万有引力だろうと牽引力だろうと斥力だろうと生命だろうと、すべてプラーナ (Prana) という一つの原始的勢力のあらわれである。プラーナはアーカーシャに働きかけて宇宙を創造<sup>1</sup>または建設しつづめる。循環の始まりに当つて、アーカーシャは動かず、顕現できていない。そのときプラーナが次第次第に活動を始め、アーカーシャから次第次第に粗大な形状を作り出す——植物、動物、人間、天体などなど。莫大な量の時間の後、この進化が停止して退化が始まる。あらゆるものが次第次第に微細な形状になつてゆき、原始的なアーカーシャとプラーナに解体してしまつたとき更に新しい循環が起つてくる。きてアーカーシャとプラーナを超越したあるものがある。両者はマハト (Mahat) ——宇宙意識——という第三の物に解体せしめられる。この宇宙意識はアーカーシャとプラーナを創造するのではない。自己を両者に変化させるのである。

1 英語の「創造」(creation) に当るものはサンスクリットでは正確には「建設」(projection) である。なぜかという、西洋で考えられているような創造——あるものが無から出てくること——を信ずる宗派はインドには存在しないからだ。われわれが創造という意味は既に存在したものから建設することである。

われわれは今、意識と靈魂と神に関する信念をとりあげよう。一般に採用されているサンクヤ心理学に従えば、知覚においては——例えば、視覚の場合——まず第一に、視覚の道具、口がある。道具——目——の背後に視覚の機関すなわちインドリヤ (Indriya 根) ——視神経とその中枢——がある。これは外面的な道具ではないが、これがなければ目は見ることができない。まだこれ以上のものが知覚には必要だ。意識すなわちマナスが来てその機関に接着しなければならない。そしてこれに加うるに、感覚が知性すなわちブダイ (Buddhi) ——意識の決定的反応的状态——に伝えられなければならない。反応がブダイからくるとき、それとともに外部世界と利己主義<sup>エゴイズム</sup>が閃き出る。それからここに意思が出る。しかし、あらゆるものは完全ではない。あたかも、あらゆる絵画が光の継起的な衝撃から構成されて一つ

の全体をかたちづくるために固定したあるものの上に統一されなければならないように、意識内のあらゆる観念は固定したあるものの上に集められ、設計されなければならない。固定したとは意識及び身体に比較してであつて、すなわち靈魂またはプルシャ (Purusha) またはアトマン (Atman) と呼ばれるもののことである。

サンクヤ哲学に従えば、ブデイすなわち知性と呼ばれる意識の反応、状態はマハトすなわち宇宙意識の所産であり変化であり一定の顕現である。マハトは顕える思想に変えられる。それが一部分は機関に変えられ、一部分は物質の微粒子に変えられる。すべてこれらの結合から全宇宙が作り出される。更にマハトの背後にサンクヤ哲学はアヴィヤクタ (Avyakta) すなわち未顕現と呼ばれる一定の状態を考えている。そこには意識の顕現すら存在せず、ただその原因だけが存在する。それはプラクリティ (Prakriti 自然) とも呼ばれる。プラクリティを越えて、それとは永遠に区別されて、プルシャがある。サンクヤ哲学の魂であつてなんら属性を有せず、宇宙に遍在するものである。プルシャは作為者ではなく目撃者である。水晶のたとえばプルシャの説明に用いられる。プルシャはなんの色もない水晶のようだと言われる。その前に違った色が置かれると、その色に染められたように見える。しかし実際には色はついていないのだ。ヴェーダーンテイストたちはサンクヤ流の魂と自然という観念を斥ける。二つの観念のあいだには橋渡しをしなければならない大きな深淵が横たわっていると彼らは非難する。一方においてサンクヤの体系は自然のところにやってくる。それから直ちに反対側に一足跳びして自然とは全然分離している魂のところへやってくる。サンクヤの言う、これらの違った色がどうして性質上色のない魂に働きかけることができるか。そこでヴェーダーンテイストたちは、そもそも最初から、この魂とこの自然とは一つであると主張する<sup>1</sup>。二元論派に属するヴェーダーンテイストたちでも、アトマンまたは神がこの宇宙の作用因であるばかりでなく、質料因でもあることを許している。しかし彼らは実に多くの言葉でそう言っているだけである。実際にそういう意味はなかつた。なぜなら彼らは次のような仕方、彼らの結論から逃れようと試みた。この宇宙には三つの存在があると彼らは言う。神と魂と自然である。自然と魂は、いわば神の身体であつて、この意味では神と全宇宙とは一つであると言つてもよい。しかしこの自然とすべてこれらのいろいろ違った塊は一切の永遠を通じて互いに違つたままでとどまる。ただ循環の始まりに当つてハッキリ現れる。そして循環が終るとき、彼らは微細になり、微細な状態にとどまる。アドヴァイタ・ヴェーダーンテイストたち——一元論者たち——は、こういう魂の理

論を斥ける。そして『ウパニシャッド』のほとんど全巻を味方につけて全くその上に彼らの哲学を打ち立てる。『ウパニシャッド』に含まれているすべての書物は、彼らの前には一つの題目、一つの仕事を有している。それは次のテーマを証明することである。「あたかも一塊の粘土の知識によつて宇宙における一切の粘土の知識を有するよう、われわれがそれを知れば宇宙におけるあらゆるものが知れるようなものは何か。」アドヴァイテイストの観念は全宇宙を一つに概括すること——実際にこの宇宙の全体であるようなあるものに概括すること——である。そして、この全宇宙は一つである、それはすべてこれらの違った形式で自己を顕現する一つの存在であると彼らは説く。彼らはサンクヤが自然と呼ぶものが存在することを認める。しかし自然は神だと言う。この存在、サット (Sat 有) がすべてのもの——宇宙、人間、靈藜、その他ありとしあらゆるもの——に変身したのだ。意識とマハトは、この一つのサットの顕現にすぎない。しかし、それではこれが汎神論になる難点が生ずる。不変的であるようなサットがどうして出て来たか。(絶対的なものは不変的だから)それが変化的な滅亡可能なものに変ずることを許している以上、それがどうして出て来たか。アドヴァイテイストたちはここで、彼らがヴィヴァルタ・ヴァーダ (Vivarta Vada) すなわち現象的顕現と呼ぶところの理論をもつ。二元論者やサンクヤ派に従えば、この宇宙の全体は原始的自然の進化である。アドヴァイテイストのあるものや二元論者のあるものに従えば、この宇宙の全体は神から進化して出たものである。そして本来のアドヴァイテイストたちやシャンカラ・チャールヤ (Shankara-Charya) の追随者たちに従えば、全宇宙は神の現象的進化である。神はこの宇宙の質料因である。しかし実在的ではなく、ただ現象的にである。ここで用いられた有名な譬喩は縄と蛇のそれである。縄が蛇であるように見えたが、実は蛇ではなかった。縄が実際に蛇に変つたのではない。同様に、この全宇宙は、それが存在するがままにかの存在 (神) なのだ。それは変つてはいない。われわれがそこに見る一切の変化は、ただ現象的 (見えるだけ) である。これらの変化はダシヤとカーラとニミッタ (Dasha 空間、Kala 時間、Nimitta 因果) によつて引き起こされる。あるいは、一層高度の心理学的概括に従えば、ナーマとルーパー (Nāma 名称、Rupa 形式) によつて引き起こされる。一つのものが他のものと相違するのは名称と形式による。名称と形式だけが相違を引き起す。実在としては、それらは同一である。また、一方に現象 (感性体) としてのあるものがあり、片方に理性体としてのあるものがあるのではない、とヴェーダーンテイストたちは言う。縄はただ現象的に (見せかけだけ) 蛇に変化したにすぎない。妄想がやむとき、蛇は消え失せる。人が無知なときは

現象を見て神を見ない。人が神を見るとき、この全宇宙は彼にとって全然消え失せる。無知または、いわゆるマーヤーがこの現象一切の原因である——絶対者、不変者をばこの顕現された宇宙として受けとること。このマーヤーは絶対的零でもなければ非存在でもない。それは存在でも非存在でもないものと定義される。それは存在ではない。なんとすれば、存在はただ絶対者、不変者についての言われるからである。この意味ではマーヤーは非存在である。また、それは非存在だとも言われない。なんとすれば、いわばそれは決して現象を産出することができなかつたからである。そこで、それは何でもないあるものである。そしてヴェーダーンタ哲学ではアニルヴァチャニヤ (Anirvachaniya) すなわち言明し難きものと呼ばれている。それでマーヤーは、この宇宙の實在的原因である。マーヤーはブーフマン (梵) すなわち神が材料を与えるものに対して名称と形式を与える。すると、それがこのすべてに変形せしめられたように見える。そこでアドヴァイタイストたちは、個人の魂に対する場所を有しない。個人の魂はマーヤーによつて創造されると彼らは言っている。實在としては彼らは存在することができない。もし、どこまでもただ一つの存在があつたとすれば、どうして、私が一人、あなたが一人というぐあいにそれぞれあるということが有りうるのか。われわれはすべて一人である。そして悪の原因は二元性の知覚である。私がこの宇宙から分離していると感じ始めるや否や、初めて恐怖が生じ、それから不幸が生ずる。「人が他人を聞き、他人を見る場合、それは小さい。人が他人を見ず、他人を聞かない場合、それは最大である。それは神である。その最大の中に完全な幸福がある。小さいものの中には幸福はない。」

1 ヴェーダーンタ哲学とサンクヤ哲学は互いに反対する点は極めて少ない。ヴェーダーンタの神はサンクヤのブルシヤから発展して来た。すべての体系がサンクヤの心理学を採用している。ヴェーダーンタもサンクヤも両方とも魂を信じている。ただサンクヤは多数の魂があることを信ずる。サンクヤに従えば、この宇宙はなんら外部からの説明を必要としない。ヴェーダーンタはただ一つの魂があつて、それが多数のものとして現れると信じている。そしてわれわれはサンクヤの分析の上に建設をする。

さてアドヴァイタ哲学に従えば、この物質の分化、これらの現象は、いわば暫定的なもので、人間の實在的性質を隠蔽している。しかし人間の實在的性質は実は少しも変つてはいないのだ。最低の虫けらのなかにも最高の人間のなかと同様に、同じ神聖な性質が現在している。虫けらの形式は神性がマーヤーのために、より多く曇らされている、より低い形式である。曇らされることの一番少ないものが最高の形式である。あらゆるものの背後に同じ神聖が存在している。ここから道徳の基礎が出てくる。他人を害するなかれ。あらゆるものを、あなた自身のように愛せよ。なぜなら、全宇宙は一つであるからだ。他人を害することによつて、私は自分を害しつつあるのだ。他人を愛することによつて、私は自分を愛

しつづつあるのだ。ここからまたアドヴァイタ道德の原理が出てくる。それは次の一言に要約されている——曰く、自己放棄。アドヴァイタイストはこのちっぽけな人格化された自己が一切の私の不幸の原因である——と言う。私をすべての他のものと相違せしめるところの、この個別化された自己が憎悪と嫉妬と不幸と苦悶と、その他すべての諸悪をもつてくる。そしてこの觀念が脱却されてしまったとき、一切の苦悶が終止し、一切の不幸が消え失せるであろう。それで、これは放棄しなければならない。われわれは最低の生物のためにも常にわれわれの生命を投げ出す覚悟をしていなければならない。人間が小さい昆虫のために自分の生命を放棄する覚悟を固めているとき、その人はアドヴァイタイストが得んと欲する完成の域に到達しているわけである。そして人がこのような覚悟を固めた瞬間、無知の面纱<sup>マヤ</sup>が彼の目からすべり落ちる。そして彼は彼自身の本性を感得するであろう。この生においても、彼は自分で宇宙と一つであることを感ずるであろう。いわば暫しの間この現象的世界の全体が彼にとって消滅するであろう。そして彼は自己本来の面目を実現するであろう。しかしこの身体のカルマが残っているかぎり、彼は生きなければならないだろう。この状態はすなわち面纱<sup>マヤ</sup>が消え失せてしまつて、しかもまだ一定期間身体が残存するとき、ヴェーダーンテイストたちがジヴァンムクティ (Jivanmukti)、生きていゝ自由と呼ぶところのものである。もし人間がある時間、蜃気楼に欺かれていて、ある日その蜃気楼が消滅すると——もしそれが翌日またはある将来に再び戻つて来ても、彼は欺かれまいだろう。蜃気楼はまだ崩れなかつた以前には、その人は実在と惑わしとを区別することができなかつた。しかし一度崩れ去つた後では、彼は目と神経が働いているかぎり、その姿を見るであろうが、もはや欺かれはしないだろう。現実の世界と蜃気楼との微妙な区別を彼はつかまえたのだ。蜃気楼はもはや彼を欺くことはできない。そこでヴェーダーンテイストは彼自身の性質を實現したとき、全世界は彼にとって消え失せてしまつている。それは再び戻つてくるだろう。だがもはや同じ不幸の世界ではない。不幸の牢獄がサット、チット、アーナンダ (Sat, Chit, Ananda) ——絶対的存在、絶対的知恵、絶対的福祉——に変えられてしまう。そしてこの境地の獲得がアドヴァイタ哲学の目標である。

(右の講演は一八九六年三月二十五日、ハトヴァート大学の大学院哲学会の席上でなされた。)

## 実在的人間と現象的人間

ここにわれわれは立っている。そしてわれわれの目は時おり数マイルも先を見る。人間は考えることを始めて以来そういうことをしてきた。人間はいつも前方に目をむけてずっと先を眺めつつある。肉体が崩れたあと、どこへ行くのか、彼は知りたがっている。種々の理論が提出され、説明をつけるために、あとからあとからいろいろな体系がもたらされた。あるものは否認され、あるものは採用された。かようにして、ここに人間がいるかぎり、人間がものを考えるかぎり、この事態は続くことだろう。これらの体系にはそれぞれある真理が含まれている。これらのすべてに真理でないものが相当含まれている。この点について、これまでインドにおいて行なわれた研究の分量と実質と結果を諸君の前に並べてみたいと思う。この問題に関してそれぞれの時代におけるインドの哲学者たちのあいだに現れた種々の思想を調和することを試みるであろう。私は心理学者たちと形而上学者たちを調和させることを試みるであろう。そしてできれば、それらを近代の科学的思想家たちとも調和させることを試みるであろう。

ヴェーダーンタ哲学の唯一の課題は一元性に対する探究である。ヒンズー族の精神は特殊なものを顧慮しない。それは常に一般者、否、普遍者に向っている。「それを知ることによってその他のあらゆるものが知れるようなものは何か。」これが唯一の課題である。「一塊の粘土の知識によって一切の粘土のそれが知れるのと同様に、それを知れば全宇宙それ自身が知れるようなものは何か。」これが唯一の探究である。この宇宙全体はインドの哲学者たちに従えば、彼らがアーカーシャ (Akasha) と呼ぶところの一つの質料に解消される。われわれが周囲に見るところのもの、手が触れ舌が味わうところのもの一切が単にこのアーカーシャの種々様々な顕現にほかならない。それは万物に滲透している微妙なものである。われわれが個体、液体または気体と呼ぶもの、数量、形状または物体と呼ぶもの、地球、太陽、月、そして星と呼ぶもの——あらゆるものがこのアーカーシャからできている。

このアーカーシャに働きかけて、それからこの宇宙を作りあげるものは、どんな力であろうか。アーカーシャと並んで普遍的な力が存在する。宇宙における力なるものは、勢力または牽引力として顕現し、いや思想としてすら顕現するが、これはインド人がプラーナと呼ぶところの唯一の力の種々異なった顕現にほかならない。このプラーナはアーカーシャに働きかけて、この宇宙全体を創造しつつある。循環の始まりに当って、このプラーナは、いわば、アーカーシャの無限の大海の中に眠っている。最初、それは静寂不動のまま存在した。それからプラーナの働きによってアーカーシャの大海に運動が起り、プ



ラーナが動き出し、振動し始めるにつれて、この大海から種々の天体が生じ、無数の太陽、月、星、地球、人類、動物、植物、そしてあらゆる種類の勢力や現象の顕現が出てくる。ここで、あらゆる力の顕現は、彼らに従えば、このプラーナである。あらゆる質料的顕形はアーカーシャである。この循環が終るだろうときは、われわれが個体と呼ぶところのものは、次の現式、次の一層微妙な、すなわち液体の形式に溶解するであろう。それが気体の形式にとけてゆくであろう。そしてそれがより微妙な、より斉一的な熱振動に移ってゆき、一切は原始アーカーシャに戻ってゆくであろう。そしてわれわれが今、牽引、反撥、運動と呼ぶものは、ゆるゆると分解して原始的なプラーナに戻ってゆく。それから、このプラーナは一定期間眠っていて、再び出現して、これら一切の形式を放出すると言われている。そしてこの期間が終ると、一切の事物が再び退却してゆく。かようにして、この創造の過程は下ってゆくかと思えば、また昇つて来て、あるいは前方へ、あるいは後方へと振子のように振動している。近代科学の言葉でいえば、それはある時期には静的<sup>静的</sup>になってゆき、次の時期には動的<sup>動的</sup>になってゆく。ある時は、それが潜在的となり、次には、それが活動的となる。この交替変化は永遠を通して進行をつづける。

けれども、この分析はただ部分的なものである。これだけのことは近代の自然科学にとつても知られている。それ以上のことになると、近代自然科学の探究の手は届き得ない。しかし研究は推理の歩みを停止しない。それがわかれば、他のあらゆるものがわかるようなあるものを、われわれはまだ発見していない。われわれは全宇宙を二つの要素、物質とエネルギーと呼ばれるもの、または古代のインド哲学者がアーカーシャとプラーナと呼んでいるものに分解した。次の段階は、このアーカーシャとプラーナを更にその根源に還元することである。両者は更に一層高い実有すなわち意識と呼ばれるものに還元せしめられる。この二つのものが産出されたのは意識、すなわちマハト、普遍的に存在する思惟力からである。思惟はアーカーシャやプラーナのどれよりも一層微妙な存在の顕現である。思惟がこれら二者に分裂したのだ。宇宙普遍的な思惟が最初に存在し、それが顕現し、変化し、この二者、アーカーシャとプラーナになって展開した。そしてこの二者の結合によつて全宇宙が産出されたのだ。

われわれは次に心理学について話そう。私はあなたがたを視ている。外界の感覚が目を通じて私にもたらされている。それが神経を通じて脳髄に伝達せられる。目は視覚の器官ではない。口は外部の道具にすぎない。なぜなら、背後にあつて感覚を脳髄に伝達する真の器官が破壊されたなら、私がたとい二十の目をもつていても、私はあなたがたを見ることはできない。網膜の上の映像がどんなに完全であつ

ても、私にはあなたがたが見えないだろう。だから、器官はその道具とは別物である。だから、目という道具の背後にその器官がなければならない。このことは一切の感覚について言える。鼻は嗅覚の器官ではない。それは道具にすぎない。その背後に器官がある。われわれの有するあらゆる感覚についてまず身体における外部の道具がある。その背後に、同じ身体の中にその器官がある。だが、これだけでは十分でない。私があなたがたに話しかけていて、熱心な注意をかたむけて私の話を聴いていられると仮定せよ。なにか事が起る、例えばベルが鳴るとせよ。たぶんあなたがたはベルの鳴るのが聞えないだろう。音響の振動は、あなたがたの耳に達して鼓膜を打っている。印象は神経によって脳髄に伝えられている。全過程が刺激を脳髄にはこぶに欠陥がないとすれば、なぜあなたがたはそれが聞えないのだろうか。何か別のものが欠けているのだ。意識がその器官に密着していないのだ。意識が器官から外れているとき、器官が何かの報道をもたらしても意識はそれを受けとろうとはしない。意識がその器官に密着したとき、そのときに限って、その報道を受けとることが意識にとつて可能になる。けれども、これでもまだ十分ではない。道具が外界から感覚をもたらし、器官がそれを内面に伝え、意識がその器官に密着していても、まだその知覚は完全ではないだろう。もう一つの要因が必要である。内部における反応がなければならない。この反応とともに知識が生ずる。外面にあるものがいわば報道の流れを私の脳髄に送りこむ。私の意識がそれをとりあげて知性にわたす。知性はこれまで受けとつた印象へそれを繰りいれて反応の流れを送り出す。この反応によって認識が生ずる。そのとき、ここに意思が働く。反応するところの意識の状態をブダイ (Buddhi)、知性という。けれども、これでもまだ全部済んだわけではない。もう一歩進める必要がある。ここにカメラがあつて、そこに布製のスクリーンがあると仮定せよ。そして私はスクリーンの上に映像を写そうと試みるということにする。私は何をしたらいいか。私は種々の光線をカメラを通じて導き、それをスクリーンの上に集中させることにする。そこに像を結ばせるにはじつとして動かないあるものが必要である。動いているものの上に像を結ばせることはできない。そのあるものは静止していなければならない。なぜなら、私がそこに投射しようとしている光線は動いている。この動いている光線はその静止しているある物の上に集められ、統一され、調整されて完成されなければならない。これはわれわれの器官がもろもろの感覚を内部に持ちこんで意識に提示し、それを意識が今度は知性に提示する作用とよく似たケースである。その背景に映像がいわば形成され、そこで一切の異なつた印象を統一するための、ある永続的なものがあるのであれば、この過程は完成し

ないであろう。われわれの存在の変転きわまりない全体に統一を与えるものは何か。刻々と運動しつづける事物の同一性を保持するものは何か。われわれの種種雑多な印象のすべてが一つにつなぎ合わされる土台は何か。知覚がいわば寄り集って定住し統一的全体を構成する土台は何か。われわれはこの役割を果たすために、あるものがなければならないことを発見した。そしてそのあるものは意識や身体に比して動かないものでなければならないことがわかる。カメラが映像を投げる布製スクリーンは光線に比して動かないものである。そうでなければ、そこに映像を結ばないであろう。それはつまり、認識者は個人でなければならないということだ。意識がこれらすべての映像を描き出すこのあるもの、われわれの感覚が精神と知性によって運ばれてそこに置かれ集められ、統一体に構成せられるこのあるもの、は人間の魂と呼ばれる。

われわれは宇宙普遍的な意識がアーカーシャとプラーナとに分裂すると述べた。そして意識の背後に魂を発見した。宇宙には普遍的な意識の背後に実存する一つの魂がある。それが神と呼ばれている。個人においては、それは人間の魂である。ちょうど普遍一元的な意識がアーカーシャとプラーナになって展開するように、それと同様に、この宇宙、大千世界において、宇宙的な魂そのものが意識として展開していることが発見されよう。個々の人間にとっても実際そのとおりではあるまいか。彼の意識が彼の身体の創造者であり、彼の魂が彼の意識の創造者ではないだろうか。ということは、彼の身体、彼の意識、彼の魂は三つの異なった存在物であるのか、それとも、この三つは一つであるのか、すなわち同一の実体の三つの存在のしかたであるのか、ということになる。われわれはそのうち順次にこの問題に対する解答を見つけようと試みるであろう。われわれが今手に入れている第一歩はこうである。ここに外部的な身体がある。この外部的な身体の背後に器官があり意識があり知性がある。そしてその背後に魂がある。第一歩としてわれわれが発見したことは、いわば、魂が身体と分離しているし、意識自身からも分離しているということである。この点で、宗教界における意見は分裂している。その起りはこうである。一般に二元論という名称で通っている宗教的見解によれば、この魂は種々の性質から成っており、喜びや快楽や苦痛の感じがすべて本当に魂に属しているとして魂を性質的に限定する。非二元論者は、魂がこのようないろいろの性質を有するということを否認する。魂を性質的に限定されないものだと言うのだ。

まず二元論者の説をとりあげてみよう。そして魂ならびにその運命について彼らの立場を諸君に紹介

することにしよう。そして最後に、非二元論がわれわれにもたらず調和を見出すことを試みようではないか。この人間の魂は意識とも身体とも区別されているし、アーカーシヤとプラーナでできていないから、不滅でなければならない。何故？ 死滅とは何を意味するか。分解だ。構成された結果生じた事物にとってのみ滅亡が可能である。二つまたは三つの成分からできているものは何でも分解されないわけにはゆかない。構成された結果でないものだけは決して分解することができない。従って死のことができない。それは不滅である。それは永遠を通じて存在してきたのである。それは創造されたものではない。創造の一コマ一コマは単に構成である。創造が無から生ずるといふことは何人も見たことがない。われわれが創造について知っていることのすべては、既存の事物をより新しい形式で結合することである。そうだとすれば、この人間の魂は単純なものであつて、永久に存在してきたに相違ない。そして永久に存在しつづけるであろう。この身体が倒れるとき、魂は生きつづける。ヴェーダーンテイストたちに従えば、この身体が崩れるとき、人間の生命力はその意識に帰つてゆき、そして精神が崩壊していわばプラーナに帰り、そのプラーナが人間の魂に入つてゆく。そして彼らのいわゆる細身<sup>1</sup>、意識的身体または靈的身体など何とでも好きなように呼んでよろしいが、いわばそういうものにつつまれて人間の魂が出てくる。この身体には、その人間のサムスカーラ<sup>2</sup>がある。サムスカーラとは何か。この意識は湖水のようなものだ。そしてあらゆる思想はその湖水のうえの波である。あたかも湖水の波が起つてはよろけて消えるように、これらの思想の波も意識の質料のなかで絶えず起きあがり、それから消えてゆく。だが、永久に消え去るといふことはない。それは次第次第に微妙に繊細になつてゆく。しかしそれらはいつもそこにあつて次の時期に起ちあがるように呼び出されるのを待つて再び出発する用意をしている。記憶は、ただそういう微妙な存在状態に移つていつた思想のあるものを波の状態のなかに呼び返すにすぎない。かようにして、われわれが考えたあらゆること、われわれがなしたあらゆる行動が意識のなかに定住せしめられる。すべて微妙な形状でそこにあり、人間が死ぬとき、これらの印象の総量が意識の中にある。意識はまた媒体としての細かい微妙な物質に働きかける。魂はいわばこれらの印象と細身につつまれて過ぎてゆく。そして魂の運命は異なつた印象で代表される一切の異なつた力の合成によつて導かれる。われわれの考えるところでは、魂にとって三つの異なつた目的地がある。

1 細身 (Sūkshma sarīra) われわれの普通の身体が粗身 (Shūla sarīra) であるのに対して、その奥にあつて、これをささえる微妙な機能と考えられた。(記者註)

2 サムスカーラ (Samskāra) 内面的傾向、『生きる秘訣』四六ページを見よ。(日本教文社刊)(記者註)

非常に靈的な人々は死ぬと、太陽光線に従って太陽界というところに到達する。そこを通過して月界というところに到達する。そこを過ぎると、電光界と呼ばれるところに到達する。そこで彼らはすでに祝福された他の魂と出逢う。それが新来者を案内して一切の境界の最高なるものブラーマロカ (Brahmaloka)、ブラーマ界と呼ばれるところへつれてゆく。そこでこれらの魂は全知全能を得て、ほとんど神自身と同様に力強く一切智となる。彼らは、二元論者に従えば、そこに永久に定住するのであるが、非二元論者に従えば、この循環の終局に普遍者と一つになる。第二級の人物、すなわち利己的動機から善行をしたものは、彼らの善行の結果に導かれて、死ぬときは月界と呼ばれるところに運ばれる。そこには種々様々の天界があつて、そこで細身すなわち神々の身体を獲得する。彼らは神々となつて、そこに住み、永い期間、天の祝福を受ける、そしてその期間を終えると、古い業<sup>カルマ</sup>が再び彼らの上に働いてくる。そこで彼らは再び地上にあともどりする。空気と雲の圏を通過し、これらあらゆる境界を経て、しまいに雨のしずくによつて大地に到達する。そこで地上に落ちて、ある穀物に付着する。それが新しい身体をこしらえる材料を供給するに適したある人間に偶然に食われるというわけである。

最後の階級すなわち悪人のそれは死ぬと幽霊とか悪魔とかになる。そして月界とこの大地とのあいだのどこか宙に棲息する。あるものは人類を攪乱しようと試みる。あるものは人類に友好的である。そこで暫く暮らしてから、今度は地上に落ちて来て動物となる。暫くの間、動物の身体で暮らしてから解放される。そして戻つて来て再び人間になる。かようにして救済をかせぎとる機会がもう一度与えられる。それで不浄分子が極めてわずかしか残っていないような、ほとんど完成に達した人々は太陽光線を通つてブラーマロカへ赴くということがわかる。天上に行きたいと考えて、この世で善行をなしたような中程度の人々は月界の諸天に赴き、そこで神々の身体を得る。しかし彼らは再び人間になつて、そこでもう一度完全になる機会をつかまねばならぬ。非常に悪い人々は幽霊や悪魔になる。それから動物にならなければならないかもしれない。そのあとで、再び人間になつて、もう一度自己を完成する機会が与えられる。この大地はカルマ・ブミ (Karma-Bhumi)、業界と呼ばれる。ここでのみ人間はその善業や悪業をする。人間は天国に行きたくてそのために善行をなすとき、神となる。そしてそのかぎり悪いカルマを積むということはない。まぎしく彼は地上でなした善行の結果を享受する。そしてこの善い業が尽きたとき彼が前世において生活中に積みかさねた一切の悪いカルマの合成力が彼の上に働きかかる、それが彼をこの地上に引きおろすのだ。同じ仕方で幽霊になつた連中はこの状態でとどまり、新しいカル

マをひき起すことはないが、彼らの過去の悪業の悪果を受けて苦しむ、それが次の段階で、一定時間動物の身体に宿り、新しいカルマを引き起すことなしに過ごす。その期間が終ると、また再び人間になる。

善業、悪業に応じた褒賞と処罰の状態は新しいカルマを生ずる力を欠いている。それはただ享樂するか苦悶するだけである。もし特別に善いカルマとか特別に悪いカルマがあるとすれば、その果実はすみやかに実ってくる、例えば、もしある人が生涯悪いことばかりやっつけて、たった一つ善い行爲をしたとする、そうすると、その善行の結果はすぐ現れてくるだろう。しかしその結果が済んでしまうと、すべての悪行がその結果を引き出さずにはいない。ある善い偉大な行爲をなした人々でありながら、生活の一般的調子が正確でないような人々はすべて神々になるであろう。一定時間神々の身体をして暮らし、神々の権力を享樂した後、再び人間に戻らなければならないだろう。善行の力がこうして終わったとき、古い悪行が働きを現してくるのだ。特別に悪い行爲をした人間は幽霊や悪魔の身体をつけなければならない。これらの悪い行爲の結果が尽きたとき、それらとつながって残っていた小さい善行が働いて彼らを再び人間にしてくれる。墮落とか後戻りとかがないブラーマロカへの道は、デヴァヤーナ(Devayāna)すなわち神への道と呼ばれる。天国への道はピトリヤーナ(Pitriyāna)すなわち父祖への道と呼ばれる。

だから人間は、ヴェーダーンタ哲学に従えば、宇宙における最も偉大なる存在である。そしてこの働きをするこの世界は、最善の場所である。なぜかといえば、ここでこそ人間が完全になるための最大最善の機会が存するからである。天使たちとか神々とか、何と呼んでもいいが、彼らはもし完全になりたいたと思えば、すべて人間にならなければならない。この人生——これこそ最も偉大なる中心であり、不思議な状態であり不思議な機縁である。

われわれは次にこの哲学の別の一面について語ろう。私がちょうど今述べてきた靈魂に関する理論の一切を否認する仏教徒たちがいる。「あるものをこの身体と意識の基体として背景として仮定するような、魂の必要があるのか」と仏教徒たちは言う。「なぜ思想の走るがままにさせてはならないのか。なぜ意識と身体からできているこの有機体の背後に第三の実体、魂というような第三の実体を認めなければならないのか。何の必要があるのか。この有機体だけでは自らを説明するのに十分でないのか。なぜ、ことさら第三のあるものをとりあげるのか。」

これらの論証はなかなか有力なものである。この推理は非常に鋭い。外面的な探究に関するかぎり、この有機体は自らを十分に説明する。すくなくとも、われわれの多くは、そういう光で、それを見てい

る。じゃあ、なぜ、基体としての魂、すなわち意識でも身体でもなくて、意識と身体の背景になっているようなあるものを必要とするのか。そこに意識と身体だけがあるとせよ。身体は絶えず変化する物質の流れに対する名称である。意識は絶えず変化する意識または思想の流れに対する名称である。何がこの二つのあいだにある見かけ上の統一を生ぜしめているか。この統一は実際には存在していない、と云うことにしよう。例えば、点火したたいまつを手にとつて、あなたがたのまえに急にぐるぐる振りまわすとせよ。あなたがたは火の輪を見る。その輪は実際には存在しない。しかし、たいまつは絶えず動いているから、一つの輪の外観を与えるのだ。そこで、その生命に統一はない。それは絶えず崩壊しつつある物質のかたまりである。この物質の全体を一つの統一と呼んでもいい。しかし、それだけにすぎない。意識についても同様である。あらゆる思想は他の思想とは別物である。統一という幻覚の背後に残るものは突進する流れにすぎない。第三の実体の必要はない。身体と意識という一般的現象は実際にあるものである。その背後にあるものを置かなくていい。この仏教徒の考え方が近代におけるある宗教や学派によつて採用されていることをあなたがたは発見するであろう。そして彼らはみなそれを新説だ、自分らの発明だと宣言している。すなわち、この世界がそれ自身で充足的なものであり、それにならな背景をも考える必要がない、すべて存在するものはこの感覺的宇宙である、なんのためにこの宇宙の支えとしてのあるものを考える必要があるのかというこの見解が多くの仏教哲学の中心観念になっている。あらゆるものはいろいろの性質の集合体である。それらの従属すべき仮説的実体が何故なければならぬのか。実体の観念は諸性質の迅速な交替変化から来ている。それらの背後に存在する変化するものから来ているのではない。これらの論証のあるものがどんなに素晴らしいものであるかがわかる。そして彼らは容易に、人間の日常経験に訴える。——実に、現象以外の何かを考えることができるものは百万人のなかで一人もないくらいだ。最大多数の人々にとっては、自然はただ変転し渦巻き、結合し、混同しつつある変化のかたまりとしか見えない。われわれのうちでその背後にある静かな海を瞥見したものは、極めて少ないのだ。それは常に波のなかに叩きこまれている。この宇宙はわれわれにとつてただ湧きたつ波浪の山として現れる。そんなふうには、われわれは、これら二つの意見を発見する。一つは、身体と意識という二つのものの背後にあるものがある、それは変化しない動かない実体だという見解である。もう一つは、宇宙には不変不動といったようなものはない、それは一切変化であつて変化でない何物も存在しないという見解である。この相違の解決は次の段階の思想すなわち非二元論のそ

れに待つ。

二元論者たちが万有の背後に変化しない背景としてのあるものを見出したことは正しいとそれは説明する。われわれはある変化しないものがなければ変化を考えることはできない。変化しにくいあるものを知ることによつてのみ変化する何かを考えることができる。その変化しにくいものも、他の一層変化しにくいものに比較すれば、より変化的なものに見えてこないわけにはゆかない。こうしてゆくとしまいには、全然変化しないあるものがなければならないということを許さざるを得なくなる。この顕現の全体は非顕現の状態にあつたのでなければならない。それは静かに沈黙したもので、なんの力も働かなかつたとき、いわば、相当する力の平均状態にあつた。なぜなら力は平均の攪乱が起つたときに働くからである、この宇宙は、その平均状態に復帰するために急いでいる。もしわれわれが何かの事実を確かめたとすれば、この事実こそ確かである。もし二元論者たちが変化しないあるものがあると主張するならば、彼らはまったく正しい。しかし身体でも意識でもなくてその底に横たわるあるもの、両者から切り離されたあるものであるという彼らの分析は誤っている。仏教徒たちが全宇宙は変化のかたまりだと言うかぎり、彼らはまったく正しい。私が宇宙から切り離されているかぎり、私が一步退いて私の前にあるものを眺めるかぎり、そこに二つの物があるかぎり——眺める人と眺められる物——常に宇宙は、始終絶えず変転する変化の宇宙であるように見えるであろう。しかし真相をいえば、この宇宙には変化と不変と両方がある。靈魂と意識と身体が三つの分離した存在物だというわけではない。これら三つのものからできている有機体は実際は一つだからである。それは身体として、意識として、そしてまた意識及び身体の背後のものとして現れるところの同一物である。しかし同時にそれらすべてであるわけでない。身体を見ているものは意識を見てはいない。意識を見ているものは魂というものを見ていない。そして魂を見ているものには身体と意識は消え失せている。運動だけを見ているものは絶対の安静を見ていない。そして絶対の安静を見ているものには運動は消え失せている。一本の縄が蛇と間違えられる。なわを蛇と見ているものには、なわは消え失せている。そして間違いがわかつて、なわを直視したとき、蛇は消え失せている。

そこで、ただ一つの一切を包括する存在があつて、その一つが多くの姿で現れるのだ。この自我または魂または実体は宇宙に存在するすべてである。その自我または実体または魂は、非二元論の用語でいえば、ブラーフマン(梵)である。名称と形式の介入によつて多数のものとして現れるのだ。海の波を



看よ。一つの波は実際に海と違ったものではない。だが、何が波を見かけ上違ったものとしているのか。名称と形式だ。波の形式と、われわれがそれに付与した「波」という名称だ。これがそれを海と違ったものとしているのだ。名称と形式がなくなったとき、やはり同じ海である。誰か波と海とのあいだに何か真実の差別をつけることができるか。そこで、この全宇宙はその唯一単位の存在であつて、名称と形式がこれらの種々様々の区別のすべてを作りあげた。あたかも太陽が何百万という水球のう上に輝くとき、小さい粒の一つ一つに太陽の極めて完全な再現が見られるように、一つの魂、一つの自我、宇宙の唯一の存在が名称と形式を異にするこれら無数の小球のすべてに反射され、種々異なつて現れる。しかし、ほんとうは、ただ一つのものである。「私」もなければ「あなた」もない。一切ただ一つである。それはすべて「私」であるか、すべて「あなた」である。この二重性、一つという観念は全然虚偽である。われわれが通常に知つていところの全宇宙はこの虚偽の知識の結果である。識別力が働いて、そこには二ではなく一しかないことを発見したとき、その人は自分がこの宇宙であることを発見する。

「今存在するがままの宇宙、不断の変化のかたまりこそ私である。一切の変化を越え、一切の性質を越え、永遠に完全なる、永遠に祝福されたものこそ私である。」

それゆえ、ただ一つのアートマン、一つの自我がある。永遠に純粹なる、永遠に完全なる、変化し得ない、変化しなかつたものだ。それは決して変化したことがなかつた。そして宇宙におけるこれら種々雑多な変化はすべて、その一つの自我における現象にすぎない。

そのうえに名称と形式がこれらすべての夢を描き出した。波を海と違つて見えしめるものは形式である。波が静まつたと仮定せよ。形式は残るだろうか。否、それは、消え失せるだろう。波の存在は海の存在に全然依存している。しかし海の存在は断じて波の存在に依存してはいない。波が残つているかぎりその形式も残つている。しかし波がなくなるや否や、それは消え失せる。残ることはできない。この名称と形式はマーヤー (Maya) と呼ばれるものの所産である。個人というものを作りあげて各人各様に違つて現れさせているのがこのマーヤーである。だが、それは存在をもたない。マーヤーは存在するということとはできない。形式は存在するということとはできない。なんとなれば、それは他のものの存在に依存しているからである。すべてこういう差別を作つていことを見れば、それが存在しているということとはできない。そこで、アドヴァイタ哲学に従えば、このマーヤーもしくは無知——または名称と形式、またはヨーロツバで呼ばれているように「時間、空間、因果関係」——は、宇宙の多種多様性

をわれわれに示すところの、この唯一無限の存在から出てきている。実体において、この宇宙は一つである。誰かが二つの究極実在があると思うが、その人は誤っている。ただ一つの実在しかないと知ったとき、彼は正しい。これは身体の方面でも、意識の方面でも、また魂の方面でも、毎日われわれに証明されつつある事柄である。あなたがたと私、太陽や月や星が同じ物質の大海における違った場所の違った名称にすぎず、この物質がその結構において絶えず変化しつづけるということは今日証明済みである。数カ月前太陽の中にあつたエネルギーの微粒子は今、人間の体内にあるかもしれない。明日それは動物のなかにあるかもしれないし、明後日それは植物のなかにあるかもしれない。それは常に行つたり来たりしている。それはすべて不滅不壊<sup>4</sup>で無限なる一つの物質集団であつて、ただ名称と形式によつて差別されたものである。一つの点は太陽と呼ばれる。他のそれは月、更に他のそれは星、他のそれは人間、他のそれは動物、他のそれは植物と以下同様である。そしてすべてこれらの名称は仮構であつて実在性をもたない。なんとなれば、全体は絶えず変転するところの物質集団だからである。この同じ宇宙が別の立場からすれば思想の大海であつて、そのなかでわれわれの各自は個別的意識と呼ばれる一つの点である。あなたは一つの意識である。私は一つの意識である。あらゆる人がそれぞれ意識である、そして同じ宇宙は知恵の立場から眺めると、目から錯覚を拭い去つたとき、意識が純粹になりきつたとき、至上純粹なる不変にして不滅なる、金剛不壊の絶対的有として現れる。

それでは、あの二元論者の三界遍歴の終末論はどうなるか。すなわち人間は死ぬと天国へ行くとか、またあつちこつちの世界へ行くとか、そして、悪人は幽霊になつて、それから動物になるなどというあれは？ 誰ひとり来るものもないし、行くものもないと非二元論者は言っている。あなたはどのように行つたり来たりできるか。あなたは無限である。あなたの行くべき場所はどこだ。

ある学校で、子供が集まつて試験を受けていた。試験官は愚かにもあらゆる種類の難問を小さい子供に訊いていた。そのなかにこんな問題があつた。「なぜ地球は落ちないのだろう。」彼のつもりでは、これらの子供から引力の観念を引き出すか、または他の複雑な科学的真理を引き出そうとしていた。多くの子供は問題の意味を理解することができなかつた。それであらゆる種類の間違つた返答をした。ところが一人の頭の好い少女は、別の質問でそれに答えた。「どこへ落ちたらいいでしょう。」これに対すると、そもそも試験官の出した問題が無意味なものだつた。宇宙には上も下もない。その観念はただ相対的なものだ。それは魂に関しても同様である。その誕生及び死に関する問題は全く無意味なものであ

る。誰が行くのだ、そして誰が来るのだ。どこにあなたはいないのだ。あなたがすでに居らない天国は  
いったいどこにあるのだ。人間の自我は遍在的である。それがどこへ行くべきなのか。それがどこへゆ  
くべきでないのか。それはあらゆる場所に存在する。そこで生だとか死だとか、諸天や最高天だとか下  
界だとか、この子供らしい夢や幼稚な幻覚は完全な人間にとっては一切直ちに消え失せる。完全に近い  
人間にとっては、ブラマロカに至るいくつかの光景を示された後になってそれが消え失せる。無知な  
ものにとっては、それは続くのである。

世間がすべて天国へ行くとか死んだり生れたりすると信じているのは、どうしたわけか。私が一冊の  
本を勉強している。一ページずつ読まれてページがめくられてゆく。次のページが来て、すむとまため  
くられる。誰が変化するのだ。誰が来たり行ったりするのだ。私ではない。本だ。この全自然界は魂の  
前では一冊の本だ。一章一章と読まれて反きれてゆく。そしてそのときどきに光景が展開する。それは  
読まれて、めくられてゆく。新しい光景がやってくる。しかし魂は常に同じ——永遠である。変化して  
いるのは自然であつて、人間の魂ではない。魂は決して変化することはない。誕生と死は自然のなかに  
ある。あなたのなかにはない。けれども無知な人々は欺かれている。ちょうど、太陽が動いていて、大  
地は動かないとわれわれが間違つて考えず、いるようなものだ。まったく同じわけで、われわれが死ん  
でゆくので、自然は死なないと考えている。だが、これらはすべて幻覚である。野原が動いていて汽車  
が動かないように思うとき、それが錯覚であるのと全く同じことである。誕生と死という幻覚も実に寸  
分たがわず同じ仕方だといえる。人間は一定の意識のワクに嵌められると、この存在を太陽、月、星と  
して眺める。同じ意識状態におかれている人々はすべて同じ事物を見る。あなたがたと私とのあいだに  
は存在の水準を異にする無慮幾百万の生物がいるかもしれない。彼らは決してわれわれを見ないだろ  
うし、われわれも彼らを見ることはない。われわれは自分らと同じ意識状態にあり、同じ水準にあるもの  
だけを見る。いわば同じ振動の譜調にある楽器だけが共鳴するのだ。われわれが「人間振動」と呼ぶと  
ころの振動状態が万一変更せしめられたなら、もはやここに人々は見られないであろう。「人間宇宙」  
全体は消え失せ、そのかわりに違った光景がわれわれの前に現れるであろう。たぶん、神々と神宇宙か、  
または悪人にとっては悪魔、群と魔的世界が現れるであろう。しかし、すべて唯一の宇宙の違った眺め  
にすぎないであろう。それは人間の水準から見て大地、太陽、月、星、その他これに類する一切として  
見られるのが、この宇宙である。それがとりもなおさず邪悪の水準から見れば罰の場所として現れるの

だ。この宇宙こそ、それを天国として見ることを欲する人々には天国として見られるのだ。玉座に坐したまう一人の神のところへ行き、そこで生涯、神をたたえつづけるということを夢みている人々は、死ぬときには彼らが心中に抱いてきたことを幻に見るであろう。すなわち単にこの宇宙そのものがさながら翼の生えたあらゆる種類の天使たちが飛びまわり、一人の神が玉座の上に坐したまうところの広大な天国に変わるであろう。これらの天国は人間自身が作ったものの一切である。そこで二元論者が言う事柄は真実だが、しかし一切合財ただ彼自身が作ったものだ、とアドヴァイタ派（非二元論者）は言う。もろもろの境界や悪魔や神々や復活や輪廻はすべて神話である。その人間生活もやはり同様である。人間が犯す最大のあやまちは、この人生だけは真実だと思ふことである。彼らは、これ以外の事柄が神話だと呼ばれるとき、それを十分理解する。しかし、同じことを彼ら自身の立場について許容することは決してしたくないのだ。現れるままの一切の事物が単なる神話である。そして一切の虚偽のなかの最大の虚偽は、われわれが身体だということである。われわれは決して身体であつたこともなければ、決してそれになり得ないのだ。われわれが単に人間にすぎないということは最大の虚偽である。われわれは宇宙の神である。神を礼拝するということは、常にわれわれ自身の隠れた自我を礼拝するということであつた。あなたが自分に言いきかせた最悪の虚言はあなたが罪人または悪人として生れてきたということである。他人の中に罪人を認める人間だけが罪人である。ここに赤ん坊がいると仮定せよ。そしてそこにあなたが黄金の入った甕をテーブルの上に置いたと仮定せよ。一人の泥棒が入つて来て、湯の黄金を持つてゆくと仮定せよ。赤ん坊にとつて、それはすべて同じことである。内心に泥棒がないから、外部にも泥棒はいない。罪人や悪漢にとつては、悪が外部に存在する。だが善人にとつてはそんなものは存在しない。そういうわけで悪い人々はこの宇宙を地獄と見る。そして部分的に善い人々はワレレを天国と見る。これに反して完全な人物はそれを神自身として描き出す。そのとき初めて面紗が目から落ちる。そしてその人間は純化され浄化されて自分の全視野が一変するのを発見する。数百万年も人間を悩ましつづけてきた悪夢がすべて消え失せる。自分を、あるいは人間として、あるいは神として、あるいは悪魔として考えていた人、自分が低い場所や高い場所に住んでいるとか天上または地上に住んでいるなどと考えていた人が、実は自分が遍在であること、一切の時間が自分の中にあるので自分が時間の中にいるのではないということ、一切の天界が自分の中にあるので、自分がどの天国にもいるのではないということ、そして人間がかつて礼拝した神々はすべて自分の中にあるので、それらの神々の一人の

中に自分がいるのではないということを見出す。彼は神々と悪魔、人々と植物、動物、岩石の製作者であった。そして人間の真の性質こそ今や天国よりも高いもの、このわれわれの宇宙よりも完全なもの、無限の時間よりも無限なもの、遍在するエーテルよりも遍在的なものとして彼の目の前に展開する。これでやっと人間は恐怖なきものとなり、自由なものとなる。そのとき一切の妄想が停止、一切のみじめさが消え失せ、一切の恐怖に永久に終止符が打たれる。誕生がなくなり、それとともに死もなくなる。苦痛が飛び去り、それとともに快楽も飛び去る。大地が消え、それとともに天国も消える。身体が消え、それとともに意識も消える。その人間にとっては、いわば全宇宙が消え失せる。この探求し運動しつつある不断の力の争闘が永久に停止する。そして勢力と物質として、自然界の闘争として、自然それ自身として、天界と地上、植物と動物、人間と天使として自己を顕現しつつあったものがすべて、一つの不変不滅の無限なる実在に変形され、それを認識するところの人間はその実在と一つであることを発見する。

「さまざまな色の雲が空に現れて一瞬間そこにたゆとうて、やがて消えてゆくように」、この翼には、大地とか天国とか、月とか神々とか、快楽とか苦痛とかいう一切の幻影が現れてくる。だが、いつも変らぬ無限の青空を一つ残して過ぎてゆく。青空は決して変ることがない。変るのは雲である。われわれが不純であるとか、われわれが制限されているとか、バラバラだとか考えることは誤りである。実在的人間は唯一の存在単位である。

二つの問題がここで起ってくる。第一はこうだ。「これを表現することは可能であるか。そこまでは教理であり哲学である。しかし、それを表現することは可能であるか。」可能である。その妄想が永久に消滅した人々はまだこの世に生きている。このような実現の後、人々は直ちに死ぬであろうか。われわれの考えるほど急ではない。一つの心棒で合わされた二つの車輪はいつしよに走ってゆく。もし私がその車輪の一つをつかまえて斧でその心棒を二つに切断したなら、私がつかまえている車輪は停止する。しかし、もう一つの車輪には運動力の惰性が残っている。そこで、頭てれは少々走ってから、倒れる。純粋完全なもの、魂は一つの車輪である。この身体と意識という外面的な幻影は働き、カルマという心棒で合わされた、もう一つの車輪である。知恵は二つのあいだの束縛を断ち切る斧である。そうすれば、魂という車輪は停止するであろう。それが来たり行ったりする、生きたり死んだりするなどと考えることや、それが自然であって欠乏や欲望をもっていると考えることを停止するであろう。それが完全であ

り欲望を脱却していることを発見するであろう。しかし、もう一つの車輪、身体と意識のそれには過去の行為の運動量が残っているであろう。そこで過去の働きの運動量が尽きるまで、その運動量が使い果たされるまでは暫時生きつづけるであろう。そのとき身体と意識が脱落して魂が自由になる。そうなれば、もはや天国へ行くとか、この世に戻つてくるとかいうことはない。ブラマロカとか最高天国とかいうところへ行くなんてことすらありはしない。なぜなら、いったいどこから来て、どこへ行くのだ。この生涯にこの境地に達した人間、少なくとも一分間でもこの世の日常的幻影が一変して、実在の相がハッキリ露呈したのを見た人間は「自由に生きる人」と呼ばれる。これがヴェーダーンタ学徒の目標であつて、生きながら自由を得ることである。

私はかつて西インドで、インド洋岸の沙漠地方を旅行していた。幾日も幾日も沙漠を徒歩旅行するのが常だつた。だが、私が驚いたことには毎日美しい湖水が見えたことだつた。それらの湖水は樹木にとりかこまれ、水面に樹木の倒影が映つて、そこで顫えていた。「なんと素晴らしい絶景だろう、これを見んなは沙漠地方と呼んでいるのに」と私は自分にひとりごとを言つた。ほとんど一カ月のあいだ私は、これらの素晴らしい湖水や樹木や草原を見ながら旅行した。ある日、私は非常に咽喉が乾いて水が飲みたくなつた。そこで私はこれらの清浄な美しい湖水の一つに向つて歩き出した。そして私が近づいてゆくと、それが消え失せた。ハツとして気がついた。「これは蜃気楼だ、私が平生いつも読んできたことはこれだつたな。」それと同時に、この一カ月毎日毎日蜃気楼を見ながら、それに気がつかなかつたという考えが浮かんだ。次の朝、私は更に旅行をつづけた。そこにまた湖水があつた。しかし同時にそれが蜃気楼であつてほんとうの湖水ではないという考えがきた。この宇宙についても同様である。われわれは、この世の蜃気楼のなかを毎日毎日、毎月毎月、毎年毎年旅行しつづけて、それが蜃気楼とは知らずにいる。ある日、それが消滅する。しかし再び戻つてくるだろう。身体は過去のカルマの力のもとにとどまらざるを得ない。そこで蜃気楼が戻つてくるだろう。この世は、われわれがカルマに束縛されているかぎり、われわれに戻つてくるだろう。男、女、動物、植物、われわれの係累や義務、すべてわれわれに戻つてくるだろう。しかし以前と同じ力をもつてではない。新しい知恵の影響下にあつてカルマの強さは打ち砕かれ、その毒害は失われるであろう。それは変形せしめられる。なぜなら、今われわれは知っているぞという觀念、実在物と蜃気楼との鋭い區別が知られているぞという觀念がそれに伴つてくるからだ。

そのとき、この世界は以前と同じ世界ではないだろう。とにかく、ここに一つの危険はある。われわれは、どこの国でもこの哲学を採用してこういうことを言う連中を見ている。「私は一切の美德と悪徳を超越している。それで道徳上の法則には束縛されない。私の好きなことを何でもしてよい。」あなたがたは現在この国でも、「私は束縛されない。私は神自身だ。私に何でも好きなことをきせろ」と放言する沢山の愚者を発見するだろう。これは正しくない。魂があらゆる物理的、意識的または道徳的な法則を超越していることは、ほんとうだけれど。法則とともに束縛がある。法則を超越して自由がある。自由が魂の性質であり、その生得の権利であることも、ほんとうだ。魂の真実の自由は人間の見かけ上の自由という形式で物質の面紗を透して輝き出る。あなたの生活の各瞬間に、あなたは自由だと感ずる。われわれは一瞬間といえども自由であると感じないでは、生きることも話すことも、いな呼吸することさえもできない。しかし同時に、ちよつと考えれば、われわれは機械みたいなもので自由ではないということが浮かんでくる。それでは何がほんとうか。この自由の観念は妄想なのか。ある派のものは自由の観念は妄想だと主張する。他の派のものは束縛の観念は妄想だと言う。どうしてこんなことになるか。人間は真実に自由であるよりほかはあり得ない。彼が束縛されてしまうのは、マーヤの世界、名称と形式のなかに這入りこんだときだ。自由意思とは命名の誤りである。意思は自由であることはできない。どうして自由であり得ようか。意思が存在に這入ってくるのは実在的人間が束縛されたときに限る。それ以前ではない。人間の意思は束縛されている。だが、意思の根底になつてゐるものは永遠に自由である。そこでわれわれが地上における人生とか、天国における神の生活とか呼ぶところの、束縛の状態においても、われわれには神聖なる権利としてわれわれのものである自由の記憶が残つている。そこで意識的に無意識的に、われわれはすべてそれに向つて努力している。人間が自分の自由を獲得したとき、なにかの法則によつて、どうして束縛されることができよう。この宇宙におけるいかなる法則も彼を束縛することはできない。この宇宙それ自身が彼のものだからである。

彼は全宇宙である。彼が全宇宙であるのか、それとも彼にとって全然宇宙というものがないのか、どちらかだ。そうすれば、どうして彼は性だとか国だとかに関するすべてちつぽけな観念を有することができるか。私は男です、私は女です、私は子供ですなどと、どうして言うことができるのか。これらは虚言ではなからうか。彼はそんなことがウソだということを知つている。これこれは男の権利だ、これこれは女の権利だ、とどうして言うことができるのか。誰も権利を有してはいない。誰も分離して存在

してはいない。男もなければ、女もない。霊、魂には性がなく永遠に純潔である。私が男だとか女だとか言ったり、私がこの国に属するとかあの国に属するとか言ったりするのは一つの偽りである。全世界が私の国であり、全宇宙が私のものである。なぜなら、それで私自身をつつんで、私の身体としているからである。しかも、この世には進んでこれらの説を肯定しながら同時にわれわれが不潔と呼ぶべき事柄を遂行する連中がいることを見ている。そこで、なぜそんなことをするのかと訊けば、彼らはそれは妄想だよ、間違ったことなどわれわれにはできないと口答えをするのだ。彼らを批判すべき標準は何であるか。その標準はこうである。

善といひ悪といひ二つながら靈魂の条件つきの表現だけれども、しかもなお悪は一番外側の外衣だが、善は実在的人間すなわち自我に一層近い衣服である。そして人間は悪の層を突破して抜けるのでなければ、善の層に達することができない。善と悪の二つの層を通過するのでなければ、自我に達することはできない。自我に徹した人に何がくつついて残るだろうか。小さいカルマ、過去生の運動量の一つのかげら、しかし、すべて善い運動量である悪の運動量は全く使い果たされて、過去の不純物がまったく焼けつくされるまでは、何人にとっても真理を見ることも実現することも不可能である。そんなわけで、自我に徹して真理を見た人間にくつついて残っているのは、過去の生活の善い印象、善い運動量である。彼が身体のなかに住んで絶えず働いているとしても、それはただ善事をするために働くのだ。彼の唇が動くのはただすべてのものに対する祝福を告げるためであり、彼の手が動くのはただ善き働きをなすためである。彼の意識はただ善い思想をいざくことができる。彼の存在は、どこへ行っても、一つの祝福となる。彼自身一つの生きた祝福である。このような人間はその存在によつて最悪の人間をも聖者に変えるであろう。彼が何も語らなくても彼のいることが人類に対する祝福になるであろう。このような人々が何か悪をすることができるだろうか。邪悪な行動をすることができるだろうか。実現することと単にその話をする事のあいだに一つの極から他の極に至る一切の相違があるということを念頭に置かなければならない。愚人でも話すことはできる。鶉でも話しはする。話すことは一つのことであり、実現することは別のことである。もろもろの哲学、もろもろの教理、もろもろの論証、もろもろの書物、もろもろの理論、もろもろの教会、もろもろの宗派、これらすべてのものは、各自の流儀において善である。しかしその実現となると、これらのものは崩れ落ちる。例えば地図は結構なものだ。だがあなたがその実際の土地を見てから、再びその地図を見たとき、なんとという大きな相違をあなたは発見するこ



とだろう。そこで真理を実現した人々はその真理を理解するために論理の理窟づけや、その他の知性の練磨など一切必要ではない。それは彼らにとっては彼らの生命中の生命であつて、具体化されて、手で触れられる以上のものになっている。ヴェーダーンタ派の賢者が言っているようにそれは「あなたの手のなかの果実として」ある。あなたは立ちあがつて、それはここにある、と云うこと、ができる。それで、真理を実現した人々は立ちあがつて「ここに自我がある」と云うであろう。あなたは一年かかつて彼らと議論してもいい。しかし彼らはあなたに微笑みかけるであろう。彼らはそれを子供の片言と思うだろう。子供に片言をしやべりつづけさせるだろう。彼らは真理を実現して満ち足りている。あなたがある国を見物したことがある。そこへ他人がやつてきてそんな国は決して存在しなかつたと言つてあなたに議論を試みると仮定せよ。その人は際限なく議論をつづけるかもしれない。しかしあなたのその人に対する心の態度だけは、その人が精神病院行きだという見解をもつに相違ない。そのとおり実現の人間は言うのだ。「この世界においてそのちつぽけな宗教に関する一切のお饒舌いさべりは片言にすぎない。実現は宗教の魂であり宗教の本質そのものである。」宗教は実現することができる。あなたは用意ができてるか。あなたはそれを欲しているか。あなたがそれを欲するなら、その実現を得るであろう。そのとき、あなたは真に宗教的になるだろう。あなたが実現に達しないかぎり、あなたと無神論者とのあいだにはなんの相違もない。無神論者は誠実である。だが宗教を信ずると口外しながら、それを実現しようと企てない人間は誠実ではない。

第二の問題は実現のあかつきに何が生ずるかを知ることだ。われわれが宇宙の唯一性を実現しわれわれがその唯一無限の存在であると仮定せよ。そしてこの自我が唯一の実在であり、これらすべての種々様々の現象的形式で顕現しつつある同一の自我であるということを実現したと仮定せよ。いったいそのあとでわれわれはどうなるのか。われわれは不活発になり、片隅の方へ行つて、そこで死んでゆくのか。

「それは世の中に何か善いことをするだろうか。」あの古い質問だ！ 第一に、なぜそれが世の中に善事をしなければならないのか。そうしなければならないという何か理由があるか。「それが世の中に何か善いことをするだろうか」というような質問をする権利を誰がもっているだろう。いったい、それはどういう意味だ。赤ん坊はキャンデーが好きだ。あなたがある電気問題と関連した研究をしていると、赤ん坊があなたに訊いたと仮定せよ。「それでキャンデーを買つてくれるの。」「いいえ。」と、あなたが答える。「じゃ、それなんの役にたつ」と、赤ん坊が言う。

同様に人々は立ちあがって言うのだ。「それは世の中になんの役にたつのだ。それはわれわれに金を儲けさせてくれるかね。」「いいえ。」「じゃあ、そこに、なんの善いことがあるんだ。」

これが世の中に善いことをするという意味である。でも宗教的実現は世界に一切の善をする人々はその境地に達したとき、そこに唯一者があると体得したとき、愛の源泉が乾<sup>ひ</sup>あがってしまつて人生のあらゆる事柄が崩れてしまひはしないか、いわば現世でも来世でも、あらゆる愛というものが消え失せてしまひはしないかと恐れている。世人といえども自分自身の個人のことにも少しも顧慮を払わない人々がこの世界における最大の働き手であつたという考えを止めたわけではない。それで愛の対象が低いちつぽけな穢<sup>よ</sup>土のものでないことを発見したときこそ愛するのだ。その人は彼の愛の対象が一塊の土ではないということ、それが正真正銘の神自身であることを発見したときこそ愛するのだ。妻はその夫が神自身であると思うとき、それだけより多く夫を愛するであろう。夫は妻が神自身であることを知るとき、それだけより多く妻を愛するであろう。母親は子供たちが神自身であると思うとき、より多く子供たちを愛するであろう。最大の敵こそ神自身であるを知つた人間はその敵を愛するであろう。聖僧が神自身であるを知つた人間は、その聖僧を愛するであろう。そしてその人間は、最も神聖でない汚れた人々をもまた愛するであろう。なんとなれば最も神聖でない汚れた人々の背景も主たる神であることを知っているからだ。こういう人間は世界の母親となる。彼のちつぽけな自我が死に果てて、神がそのかわりになっているのだ。全宇宙はその人にとっては変化してしまつている。苦痛に満ちた惨めな事柄は一切消え失せるであろう。闘争は一切休止してしまふだろう。毎日毎日一片のパンのために闘争し、たたかい、競争するところの牢獄であるかわりに、この宇宙はそのときわれわれにとって運動場になるであろう。そのときこの宇宙は美しいものになるではないか。そういう人こそ立ちあがって、こう言う権利がある。「この世界はなんと美しいことか！」そういう人だけが一切は善だと言う権利をもっている。これこそ世の中にとつても、かかる実現に基づくところの偉大なる善であろう。

一切の衝突不和をもつて進行するこの世界のかわりに、もし一切の人類が今日あの偉大なる真理のかけらだけでも実現したなら、全世界の面目は一新されるであろう。闘争と喧嘩にかわつて平和の支配があるであろう。他人より一歩先へ出ようとわれわれを駆りたてている不作法な野獸的な焦燥は、そのとき世の中から消え失せるであろう。それと同時に一切の闘争が消え失せ、一切の憎悪が消え失せ、一切の嫉妬が消え失せ、そして一切の悪が永久に消え失せるだろう。そのとき神がこの地上に住みたまう

であろう。そのとき、この大地が天国となるであろう。神々が神々とともに遊び、神々が神々とともに働き、神々が神々を愛するとき、なんの悪というものがあり得ようぞ。これが神聖なる実現の偉大なる御利益である。あなたが社会で見ているあらゆる物事がそのとき一新され変形するであろう。あなたはもはや人間を邪悪とは思わないだろう。それが第一の大きい儲け物だ。あなたは貧乏な男女が何かあやまちをしたとき嘲笑の一瞥を投げつけるようなことは、もはやしないだろう。淑女たちよ、夜、街頭に媚を売る貧乏な婦人に対して軽蔑をこめて見下すようなことは、もはやしないだろう。なぜなら、あなたがたはそこにも神自身を見るだろうからである。もはやあなたがたは嫉妬や刑罰を考えないであろう。それらはすべて消え失せるだろう。そして愛——人類を正しく導いてゆくには、管や縄など必要がなくなるほど、かの偉大なる愛の理想が力強いものになるであろう。

もし、この世界に住んでいる男女の百万分の一でも単純に突き坐つて数分間次のように言つたなら全世界は半時間のうちに一新されるだろう。

「あなたがたはすべて神です。おお、あなたがた人々よ、おお、あなたがた動物たちよ、そして、生きとし生けるものよ、あなたがたはみんなただ一人の生きていらつしやる神様の御化身でいらつしやいます。」

恐るべき憎悪の爆弾を到るところに投下するかわりに、嫉妬と悪意の流れを注ぎこむかわりに、あらゆる国々で人々は一切が彼(神)であると考えようになるだろう。彼(神)はあなたが見るところの、感ずるところの一切である。あなたの中に悪がないのに、どうして悪を見ることができよう。あなたの心の奥に坐っている泥棒がいなしければ、どうして泥棒を見ることができよう。あなた自身が人殺しでなしければ、どうして人殺しを見ることができよう。善くあれ、そうすればあなたにとって悪は消え失せるだろう。全宇宙はかようにして変革せしめられる。これが社会にとって最大の利益である。これが人類有機体にとって大きな利益である。これらの思想は古代インドで多くの人物のあいだで考えぬかれ、吟味しつくされたものであつた。祖師たちの秘密主義や外国の征服などいろいろの理由によつてこれらの思想は普及することが許されなかつた。けれども、これらは壮大な真理である。それらが働きをあらわしたところでは人間は神聖なものとなつた。私の全生涯はこれらの神聖な人々の一人に触れたがために変革せしめられた。その人については次の日曜日にあなたがたにお話することにしよう。これらの思想が全世界にひろげられる時が来つつある。修道院に住むかわりに、学者だけが研究する哲学書

類に閉じこめられるかわりに、宗派や少数の学者の専有物になるかわりに、全世界にふりまかれるであろう。そのために聖者と罪人、男と女と子供、学者と無学者の共有財産になるように全世界にふりまかれるであろう。そうすれば世界の雰囲気にも滲透するであろう。われわれの呼吸する空気そのものがその一つ一つの脈搏とともに「汝はそれだ」と言うであろう。幾千万の太陽や月をかかえた全宇宙はものを言うあらゆるものの口を通して異口同音に「汝はそれだ」と言うであろう。

- 1 「汝はそれだ」、「Thou art That」『チハンドギヤ・ウペニシャット』(Chhândogya Upanishad VI) に見えている、あの有名な言葉「Tat tvam asi」の訳である。『ブリハドアーラヌヤカ・ウペニシャット』(Brihdârnyaka Upanishad I) にある「Aham Brahma asmi」「われは梵である」とともに一つの大格言 (mahâ vākya) として数千年間インドの思想界を支配し、その哲学体系を端的に表現してきた。(訳者註)